

政治権力と人間の自由

—B・ラッセルの所説に基いて—

金子 光 男

(1)

サルトル (J. P. Sartre) は、本年度ノーベル文学賞に決定されながらも、その榮譽のために、自己の自由が束縛されるとの考えのもとにこれを辞退したことは、人間の自由を実存主義者としての思想的立場において、主体的に実践したものであるということができよう。自由とは、かくのごとく観念的な論理的操作によって、概念のなかで体系化するものでなく、いかに主体的な実践行動として具体化するかということである。おもうに人間の歴史は、いかに自由を求め拡大するかとしてたたかってきたかという歴史である。そしてその自由のたたかいは、人間の政治権力とのたたかいであり、経済体制とのたたかいであり、また科学技術とのたたかいでもあった。そして現在はずまずそのたたかいは熾烈を極めてきたのである。

近代にあっては、市民社会の発達が自由競争という資本主義的テーゼにより、概念的に自由を実現することが意図され、カント (Kant) やフィヒテ (Fichte) にみられる観念的、叡知的自由や、ヘーゲル (Hegel) の絶対的理念への自由などが主張された。しかし近代社会の発展につれて、自由の端的な実現はしだいに困難となり、科学技術の進歩は、さらに人間そのものを機械化し平均化して自由の主体たるべき人間の自覚も喪失されるにいたった。こうした現代的状況のなかで、社会変革を媒介としての未来的主体としての自由の実現や、自己の根源的な自覚による超越を媒介としての個体的な自由の実現をはかろうとする思想が形成されていったのは当然であろう。政治権力の強大化、社会体制の独占化、さらに科学技術の長足の進歩のなかで、自由はまさに苦悶している。こうしたなかで、人間の自由はいかにして確立されるのであろうか。

おもうに自由の問題は、哲学や倫理学の根本問題である。しかし、いままで哲学や倫理学において、政治権力や社会体制や科学技術との対決のうえで、自由がどのように考えられていたのであろうか。それによれば、自由は、まず主観的契機と客観的契機とをもつ。そして前者は、あらゆる外部的拘束から解放されるもので、政治的、経済的また社会的な諸条件と関連するものであり、(これは liberty という概念で用いられた) 後者は、内部的な自己の自覚であって、形而上的、精神的また宗教的な諸条件と関連するものである。(これは freedom という概念で用いられた) そして自由とは、これら両契機を綜合同一したものであるといわれてきた。もとより論理的、形式的にはそうであるが、これだけの概念的操作だけでは、政治権力や社会体制や科学技術と対決し、主体的実践としてあらわれるべき自由の核心に迫ってはいない。こうした問題への論理的かつ実践的な解明を与えるものとして、われわれはバートランド・ラッセル (Bertrand Arthur William Russell, 1872-) を取り上げざるを得ない。

ラッセルは、その透徹した知性と不屈の意志とをもって、ただ書斎で哲学を論じ自由を語るのではなく、人間の自由を確立し、世界の平和を建設するという一大信念のもとに、核兵器反対の重要性にかんがみ、非暴力、不服従運動の先頭に立って活躍している。彼がロンドンのトラファルガー広場で坐り込みを指揮し、禁固の刑を宣告されたことは、まだわれわれの記憶になまなましい。ことに最近では、キューバ危機に際し、彼は東西両陣営の首脳部をはじめ、世界の有力者たちに直接呼びかけて、その危機打開に努力した。そして事実彼のこの訴えは世界の政治家をして平和的措置をとらせ、戦争を回避させるにいたったのである。彼は言論において人類存亡の危機への警告を発するとともに、それを解決するための実践的行動を演じているのである。われわれは、彼のこうした姿勢と行動とに、文句なく敬意を表せざるを得ないとともに、彼のその姿勢と行動のなかに、彼独特の自由に対する深い論理性と洞察力とが介在していることを知らなければならない。

ラッセルの自由は、前述したサルトルの自由のように、ただ主体的個体における自由の実践とはちがって、人間個人をしてはもとよりのこと、さらに人類の一員として、全世界が自由と平和とを築くことができるという最高価値の実現へとつながるものである。そこにラッセルの自由の積極性と前進性を把握することができるのである。

ラッセルの自由の概念は、彼の社会思想における支配的な価値である。彼の社会思想は、シルプ(P. A. Schilpp)の編集した『バートランド・ラッセルの哲学』(The Philosophy of Bertrand Russell, 1944)で示されているように、すべて「個人の自由に対する圧倒的な信念」⁽¹⁾からでている。そしてこのことは、彼が社会科学のもっとも重要な概念を権力であると考えた⁽²⁾ことと軌を一にする問題なのである。なぜならば、人間の自由の問題は、権力との対決において、はじめて具体的に把握できるからである。権力と自由、すなわち、政治権力と人間の自由という問題こそ、ラッセルの生涯かけての課題なのである。すでにわたくしは、ラッセルの政治権力に対する教育の在り方を考え、⁽³⁾つづいて政治権力に対する倫理の在り方を考えた⁽⁴⁾。本稿においては、いよいよ政治権力に対する人間の自由の問題を考えてみようと思う。

(2)

ラッセルは、自由をいわゆる哲学的な体系として概念的に確立しようとしてはいない。そしてまた自由というものに対する彼の考え方と取り組み方も、時代の変遷と社会の発展につれて変更している。ただ彼の思想で終始一貫しているのは「自由な個人人格の強調」という点であり、政治的、経済的理論のめざす自由は、あくまで個人人格という究極価値に奉仕する手段価値にすぎないという根本的立場である。それは彼が、『権威と個人』(Authority and the Individual, 1949)のなかで、「究極価値は、全体でなく個人のなかに求められねばならない。よき社会はそれを構成する各個人がよく生きるための手段であり、それ自体において独自の価値をもつものではない」⁽⁵⁾といっているところから明らかである。

ラッセルは、社会思想にあらわれてくる自由を、まず常識的な意味として、個人ないし集団の活動を外部から統制しない、とくに政治権力による強制の欠如という概念としてとらえた⁽⁶⁾。そしてこのような自由のとらえ方では、現代のように社会機構の組織化がはげしくなり、人間は創意によって活動するよりも、権威によって強制される行動が多くなってきた時代にあっては、個人の自由を伸長することはできないことを指摘した⁽⁷⁾。彼は近代の自由主義を批判して、その消極性のゆえに現代のその妥当性に疑問をもち、もはや正しい概念ではないと主張する⁽⁸⁾。個人や集団に対する外部的な統制の欠如だけの自由は、今日ではもはや無意味なのである。では現代における自由は

いかにあるべきであろうか。それへの通路として、彼が自由を論理的に分析した最近の著作によって考察を進めてみよう。

ラッセルは、『事実と虚構』(Fact and Fiction, 1963)のなかで、「自由とは何か」(What is Freedom?)を論じ、まず第1に、だれがその自由を享受するかということで、国家と集団と個人をあげ、第2に、何に関する自由なのかということで、政治と経済と精神とをあげている。そして前者が、「国家的自由」(National freedom)、「集団的自由」(Freedom of the group)、および「個人的自由」(Individual freedom)であり、後者が、「政治的自由」(Political freedom)、「経済的自由」(Economic freedom)および「精神的自由」(Mental freedom)であるとしている⁽⁹⁾。

ラッセルは、まずだれが自由を享受するのかという点について、現代では集団を媒介としなければ、影響力を発揮できないのであるが、しかもなお個人の自由をもっとも重要であるとする。それは政治権力や社会的統制や狂信的イデオロギーから人間の自由を擁護するためには、個人の価値を尊重し、その権利を確立しなければならないからである。彼は、「個人の価値を強調することは、これまでのどんな時代よりも、現在にあってはとくに必要である」⁽¹⁰⁾といい、社会の発展は個人の活動がその決定的な要因であるとしている。これらの個人の創造的衝動によって、もっとも価値の高い芸術、道徳、科学、思想または愛などが発揮されるのである。それゆえにこそ、彼の「よき社会は国家の栄光から生まれるのではなく、個人の拘束されざる発達から生まれる……よきことのすべてが実現されるのは、じつに個人であって、個人の自由な成長こそ世界を再建すべき政治組織の究極の目的でなければならない」⁽¹¹⁾ということばのなかに、個人の自由を抑圧し、破壊する政治権力や経済体制を徹底的に排撃せんとする気魄の躍如たるものを理解しうるのである。

つぎにラッセルは、何に関する自由かということで、政治的条件や経済的条件によって束縛を受けることのない状態が必要であるとしているが、政治理論や経済技術のめざす自由は自己目的ではなく、これらはあくまで個人人格のためのものでなければならない。よき社会はそれを構成する各個人がよく生きるための手段であり、それ自身において独自の価値をもつものではないのである⁽¹²⁾。ここに彼が精神的自由を主張する所以がある。自由と組織を論じたなかで、彼はいつている。「歴史を動かす重要な因子は、政治理論 (political theory) と経済的技術 (economic technique) とさらに重要人物 (important individuals) そのものである。」⁽¹³⁾と。ここで彼が、個人としての重要人物をとくに強調していることはいうまでもない。科学者、思想家、文学者、芸術家および宗教家などは、個人としての精神的自由の勝利の凱歌を示したものにほかならない。精神的自由こそ、このような望ましい衝動を発揮する根源ともなるものである。

かくのごとく、ラッセルは、自由を種々の形式から分析して、人類の将来に残すべき最大の遺産は、結局のところ、個人の自由を集約することができると考えたのである。彼はいう、「一つの時代、一つの国民に、その存在価値を与えるものは、生活の歓びや芸術や科学の自発的創造における表現である。これらは国家の前に跪拝することによって確保されるものではない。これらが実現されるのはじつに個人においてであり、個人の自由の成長こそ、世界を再建すべき政治組織の究極の目的でなければならない。」⁽¹⁴⁾と。そして個人のもつこのような意義と使命を無視したり破壊したりする政治権力や、経済体制やさらに狂信的イデオロギーから個人を擁護し、これを育成するものこそ教育の重要な仕事となるのである。ラッセルは、およそ文明国といわれているすべての国家における教育が、若きひとびとの心を萎縮させ歪曲させてしまうような教育であることを看破し、人格を無視し個性を蹂躪して、すべての子どもを、ある特定の政党や政治の道具として形成せんとする教育を断乎として排斥するにいたるのである。

(3)

つぎにラッセルの自由の問題への核心に迫って考えてみよう。現代のように、人類の前途に希望を発見することの困難な時代はまたとない。ラッセルは、現代をもって「恐怖が全世界を蔽っている時代」⁽¹⁵⁾といい、また「全人類がどうすることもできない困惑の感のうちに明け暮れている」⁽¹⁶⁾といている。かかる時代にあっては、18～19世紀の近代的自由主義の立場では、自由を確立することはできない。自由は、ヤスパース (K. Jaspers) がいうように、「現代は自由の否定に向って狂気のように突進している」⁽¹⁷⁾のである。

たとえ政治的条件や経済構造や社会組織などが、すべて人間のためのものに改善されたとしてもそれだけで幸福な社会が実現するものではない。個人や集団に対する外部的統制の欠如だけの自由、つまりある何ものか「からの自由」では、この危機と悲慘を突破できない。其の価値は外的なものではなく、個人の内部から発するものである。ラッセルの提唱する自由は「からの自由」に対して「への自由」と表現することができる。これは何に対して志向する自由なのであろうか。彼によれば、真実の自己に志向した自由なのである。おもうにあらゆる束縛から解放されるという「からの自由」は消極的な自由であり、自己の確立という、「への自由」は積極的な自由である。かつてフロム (E. Fromm) は、これら両者の自由のあいだに深淵が生じ、不安と動揺のために自由の重荷を感じて、「自由からの逃走」(Escape from freedom) が生じたと述べた⁽¹⁸⁾。ラッセルは、この自由の主体たる個人が空虚となった人間危機の克服に努力したのである。

ラッセルは、このような観点に立って、自由の中枢的契機として、「知性」(intelligence) をあげる。知性とは、政治権力や宗教的迷信や伝統などに操作されないで、真実と虚偽とを判然と弁別することのできる能力である。これは正しい社会的認識にもとずき科学的精神に裏付けられたもので、人類の進歩に必要欠くべからざるものである。われわれは、この知性によって、政治や経済や社会の構造や運営の真の姿を知るとともに、「人間のあいだの憎悪の念や貪欲や競争心などを、共通の危険の洞察にもとずく新しい知恵におき直すことができる」。⁽¹⁹⁾政治権力は、政治の在り方に対しての正しい認識力や批判力が育たないように真理を隠蔽し、偽善を粧い、民衆をして考えることを知らさないで、その体制を微動もしないようにするものである。そのためにこそ、われわれは、この知性によって、自己の行動の根拠を確立し、権力の操作への認識を高め、もって社会的病弊を匡正しなければならないのである。

ラッセルは、自由の構成要素として「知性」のほかに「個人的創意」(individual initiative) と「自尊」(self-respect) とをあげる⁽²⁰⁾。政治権力に利用される人間性の権力への衝動を馴致するためには、人間性の基礎である衝動が破壊でなく建設に向けられ、創造的衝動として発動されなければならない。人間は創造的に生活できるときにのみ、はじめて真実の生き甲斐を発見するものである。現代人は体制の圧力と権力の統制と生活の機械化のために、創造の喜びを忘却しているが、創造的活動力を発揮する機会があれば、生まれかわった喜びを味わうことができるのである。ここに個人的創意の重要性が存在する。さらに自尊は、人間がいかなる状況のなかにおかれても、卑怯な振舞いをすることなく、正義に殉ずる気概をおぼえさせる力をもつものであり⁽²¹⁾、だれが何といおうと自分の確信するところに向かって勇気をもって断行するものである。彼はこの三つが確立されてこそ、社会の道徳的、知的進歩が可能となると論じている。

このように、ラッセルの自由の本質は、真実の人間、真実の自己を志向するものであり、ラッセルは、これを「人間的自由」(Personal liberty) といている⁽²²⁾。人間的自由は、政治的自由で

も思想的自由でもない。人間自身の内に秘められたあらゆる可能性や潜在性を建設的に再構成することによって、真実の自己を建設するところから発する自由である。ラッセルは、人間的自由に対しては Personal liberty という概念を用い、政治的自由、経済的自由、精神的自由、および国家的自由、集団的自由、個人的自由というときには、それぞれ Freedom を使っているところに、自由の概念への思想的発展をよみとることができる。このような概念把握は、彼が、政治権力の指示に対して無批判的に盲従し主体的見解をもたない大衆の人間をもって「市民」(the citizen) といひ、正しい認識力や批判力を持ち、自らの知性にしたがって断乎として行動する人間をもって「個人」(the individual) といっている⁽²³⁾ことにもあらわれている。

ところでラッセルによれば、この人間的自由は、つねに政治権力との対決において確保されるものである。政治権力は、現代の進歩した科学技術と野合したときに抑制しがたい強大な力となって人間の自由を圧迫する。現代は、ファシズムやナチズムにみられる全体主義的な政治権力のもとだけでなく、自由主義的な国家といわれるところでも、自由の名のもとに、人間の自由と知性に対して苛責のない弾圧が加えられているのである。ラッセルは、「これらはすべて自由に対する罪悪である。そして状況がさらに緊迫化すれば、それだけますますかかる罪悪が自由のためにと称して正当化されるよになると考えられる」⁽²⁴⁾と警告を発している。

さて現代社会において、人間の自由を擁護するためには、この現代の狂気的状況を徹底的に治療する必要がある。ラッセルは、そのためにはつぎの三つの条件が必要であるとする。第1は、民心の安定 (Security)、第2は、経済的繁栄 (Prosperity) そしてさいごに自由主義教育 (A liberal education) であると⁽²⁵⁾。そして彼は、このなかでもとくに自由主義教育を重要視する。それは全体主義のイデオロギーの国家はもとよりのこと、自由主義の国家でも、教育の自由が維持されていない状況を熟知していたからである。それは現代教育を支配する権力が、つねに国家の掌中に握られているからである。そして現代教育が当然享受すべき自由が圧迫され平和が乱されるのである。これこそ彼のいう「進歩・自由および知的創意のあらゆる可能性に終止符が打たれている」⁽²⁶⁾のである。

教育は政治的現実のなかにあって、いかにして人間の自由を確保し、すすんで世界平和に貢献するかに応えるものでなければならない。人間の自由を確立する教育は、なんとしても子どもが残酷な狂信主義者に破滅させられないようにすべきであり、それには完全に科学的精神の独立を養わせ、正しい批判的判断力を培うようにすべきである。そしてこのような人間こそ「自己自身に依るもの」⁽²⁷⁾であり、この自己自身の確立こそ、知性を媒介とした人間の自由の体现者なのである。

(4)

さてラッセルは、『事実と虚構』(Fact and Fiction) のなかで、「自由の将来」(The future of freedom) についてつぎのように論じている。われわれが自由を存続させたいと思うならば、自由のための教育を徹底しなければならない。それには青年に、相互に憎悪させたり、相互に殺害をさせたりすることを義務とみなすような考えを吹きこむ教育を断念させることが大切である⁽²⁸⁾。もし自由がこの世に残るとすれば、そしてもし人類が無益な自殺行為で自滅しないようにするならば、理性的に振舞い、独断的に行動しないことをまなばなければならない。科学の分野では、正しい知的態度が教えられながら、政治や倫理の分野では狂信的態度が横行している。

本当に自由を残そうと思うならば、われわれは、自由の価値を意識し、自由の知的条件を意識しさらに必死のたたかいをしないと自由が失われるという危険を意識しなければならない⁽²⁹⁾。西欧

が身につけてきたもので今後保持すべき遺産中もっとも重要なものは、個人の独創力と自由とを尊重する気持ちであるとし、「政府は個人のために存在し、個人は政府のために存在するのではない」⁽³⁰⁾ という基本的立場を堅持し、この信念が無視されているところに現代の危機があるとしている。はたして人間に生き残る未来があるのだろうか。

ラッセルは、人類が生き残り得るところに自由のぎりぎりの姿を見出している。そしてこの考えは、彼とシドニー・フック (Sidney Hook) との激烈な論争のなかで如実に展開された。それはラッセルがもし共産主義国が核兵器の管理案に同調しない場合には、全世界が коммуニストの支配下におかれようとも、一方的な核武装解除に賛成するといういみの発言をしたことに端を発し、これは西欧側に重大な不利をもたらしたばかりでなく、倫理的にも自由を生命よりも軽くみる立場であって、断じて承服することはできないとした⁽³¹⁾。

西欧側の一方的軍縮を支持したラッセルのこの見解は、フックのような反共主義者を憤激させ、他方では一部の共産主義者を喜ばせるにいたった。フックは、このことを、 коммуニストはかつてラッセルを「帝国主義の走狗」と呼んだが、いまは彼を「平和の真の友」としてまつりあげているのではないかといっている⁽³²⁾。フックは、自由と生存のための外交政策が、人類の生命を絶滅にみちびいたとしても、 коммуニストの勝利に比較すれば、なおましであると考えたのに対して、ラッセルは、 коммуニストの勝利は、人類生命の絶滅というがごとき悲惨に比較すれば、ましであるという考えをもって反対したのである。

これはつまり、フックが「自由か然らずんば死か」と考えるのに対して、ラッセルは「生存か死滅か」と考えているのである。フックは、西欧自由主義国とその同盟国の共通の遺産としての自由を擁護し、これをして коммуニズムに対する真の防衛力たらしめねばならないとする。ラッセルは、フックが自由を尊重しながら、 коммуニズムにおける自由を認めていない点を指摘して、自由への論理的矛盾をつき、さらに彼が死よりも коммуニズムのもとでの生を選ぶとする人間の自由を認めようとしないのであると攻撃した。ラッセルは、自由主義国でも коммуニズム諸国でも、もっとも人間の基本的な自由は、「生き残ることを選ぶ自由」(freedom to choose survival)⁽³³⁾ でなければならないと確信しているのである。ラッセルが、いかに危機にさいして人間の正気を重視し評価しているかが、この論争を通して理解されるのである。

彼は、現代の深刻な危機に際会して、われわれ人間にとって何よりも大切なことは、「正気になってまともに物事を考えてみる」⁽³⁴⁾ という気持ちだと主張する。自由か死かではなくて、生存か死かの危機に直面している今日においてこそ、人間精神の正気が重要なのである。そしてこの「生き残ることを選ぶ自由」の考え方が、彼の平和思想へと展開されていくのである。ラッセルはいう、平和への道か、人類自滅への道かは、われわれがそれを選ぶものであると。人類は果して今後生存をつづけることができるであろうかの質問に対して、彼は、絶対の確信をもって然りということができると応えている。それは彼が人間の知性と自由とを永遠に高く評価していることであり、そこにまた彼の人間肯定と人間信頼とがあり、さらに明日に希望をつなぐ信念が存するのである。

(5)

ラッセルは、現代自由主義の輝ける旗手として、観念の世界で呼びかけるのではなく、実践行動によって平和と自由と知性の擁護を叫んでいる。しかも人間の自由や知性には、つねに危機がともなっている。自由主義というものは、多くの場合、社会的行動に対してはつねに消極的な態度をとってきた。第1次大戦でも、また第2次大戦でも、知識人の無気力さは確定的なものであった。もと

よりすべてを賭けて政治権力と対決して、自由を守ろうとしたものもいたけれども、つね日頃の理論はかなぐりすてて巧みに権力に迎合し、社会に妥協してその知性と自由とを喪失していったのであった。

われわれの日常生活は協力的でなければならない。しかし権力や世論へ無批判的に屈従することは、けつして協力的態度ではない。むしろわれわれが重大な決意を要求されるときは、権力へ盲従したり妥協したりすることよりも、人間として断乎たる態度に出なければならないときもある。協力の名のもとに盲従が強いられ、結果として社会の福祉が高められず、社会が危機に陥ろうとしているときに、拱手傍観するならばこれは真の協力の在り方ではない。

ラッセルは、こうした世界的ともいうべき知識人の無気力さや不見識をはるかに越えて、ひとり自由と知性とのために光榮ある孤高を維持したのである。社会の正義と人間の自由とをあくまで擁護すべき知識人が、いったん危機に直面したとき、なぜ勇敢に堂々と事態に対処できないのであろうか。そもそも知性や自由というものは、ただ人間の観念の抽象的な形においてのみ存在するだけで、社会的に意義ある行動にまで発展しないならば、その社会的使命は完全に果たされているとはいえない。自由は、たしかに倫理的実践への理論的内容を形成するものであり、それが可能的現実を生ぜしめるものであるかも知れないが、しかしそれはまだ概念のなかでの自由である。自由はそれが行動するときにはじめて存在するものである。また自由の重要な価値を認識するためには、人びとは自由の行使の修練を経なければならない⁽³⁵⁾。

このような人間は、一般の世論と自己との信ずるところが本質的に相容れない場合に、世論に対して全く無関心でいることのできる人である。このような人間に必要な勇氣というものは、世人の賞讃のために行動するという勇氣ではなくて、「自己の内部から生きる」(to live from within)⁽³⁶⁾という勇氣である。彼はいう、「われわれが、自己の見解が重要であると信じたときには、かりにそれが世間の評判を得なくとも、これを宣言するだけの勇氣をもっていなくてはならない」⁽³⁷⁾と。そしてこのような自らの良心と知性と勇氣とをもった人間こそ、例外者の人間であり、しかも世界危機の今日にあっては、この例外者の人間がひとりでも多く出ることが人類の歴史を前進させるものなのである。そしてラッセル自身が、この例外者の存在として、自由と知性との擁護を絶叫しつつ平和確立への陣頭に立っているのである。

現代自由への道は、政治権力に対して不断の抵抗を重ねながら、人間的自由こそすべての善のなかでもっとも貴重なものであるということの確実な認識によって、はじめてかちとられるものである⁽³⁸⁾。ニブレット(W. R. Niblett)もいっている。「自由への道は、逃避を試みることなく、むしろ深く生きることをまなぶことによって可能である」⁽³⁹⁾と。深く生きるということこそ、ラッセルのいう、権力の圧迫に屈することなく、個人として知性的独立人となるべく努力することである。こうした不断の努力と持続的な運動によって、人間はいつまでも輝ける自由を回復し維持することができるのである。

「人類に対する不法が、法の名においてわれわれに強制されようとしている。わたくしは、人類に対する不法に服従することを拒否する。わたくしは、哲学者としてでなく、またイギリス人としてでなく、一箇の人間(a human being)として要求する。人類を滅ぼしてはならない」⁽⁴⁰⁾という情熱あふれるラッセルのことばが、あの炯々として人を射るごとき眼光とともに、われわれの胸に迫ってくる。ここにわれわれは改めて、永久に人間の自由を求め、崇高な人類の理想をかがけている巨人の姿をおもい出すのである。本稿では、彼の自由の思想を政治権力との対比において若干の考察をするにとどめたがいずれ改めて、彼の人間形成論を分析することにしたい。

- 註(1) P. A. Schilpp, The Philosophy of Bertrand Russell,
E. C. Lindeman : Russell's Concise Social Philosophy, P. 559
- (2) B. Russell, Power—A New Social Analysis, P. 10
- (3) 東京家政大学研究紀要 第4集 拙稿論文「B. ラッセル教育思想研究」—政治権力と教育—
- (4) 日本倫理学会発行『倫理学年報』第14集 拙稿論文「B. ラッセルの政治権力と倫理について」
- (5) B. Russell, Authority and the Individual, P. 73
- (6) : , Fact and Fiction, P. 49
- (7) : , The Scientific Outlook, P. 224
- (8) : , The Impact of Science on Society, P. 74
- (9) : , Fact and Fiction, PP. 50~70
- (10) : , Authority and the Individual, P. 44
- (11) : , Roads to Freedom, P. 145
- (12) : , Authority and the Individual, P. 73
- (13) : , Freedom and Organization, Preface.
- (14) : , Roads to Freedom, P. 145
- (15) : , New Hopes for a Changing World, P. 166, P. 211
- (16) : , Ibid., P. 9
- (17) K. Jaspers, Rechenschaft und Ausblick, S. 295
- (18) F. Fromm, The Fear of Freedom, P. 30
- (19) B. Russell, Human Society in Ethics and Politics, P. 212
- (20) : , Authority and the Individual, P. 79
- (21) : , Ibid., P. 79
- (22) : , Fact and Fiction, P. 59
- (23) 広島大学教育学研究会発行『教育学』第14巻 柴谷久雄「B. ラッセル教育思想研究序説」
B. Russell, Education and the Social Order, P. 12
- (24) : , Has Man a Future? P. 44
- (25) : , New Hopes for a Changing World, P. 128
- (26) : , Sceptical Essays, P. 157
- (27) : , Education and the Social Order, P. 12
- (28) : , Fact and Fiction, P. 70
- (29) : , Ibid., P. 72
- (30) : , Ibid., P. 72
- (31) S. Hook, Political Power and Personal Freedom, P. 427
- (32) : , Ibid., P. 432
- (33) : , Ibid., P. 438
- (34) B. Russell, Common Sense and Nuclear Warfare, P. 13
- (35) H. J. Laski, Liberty in the Modern State, P. 50
- (36) B. Russell, On Education, P. 53
- (37) : , Ibid., P. 64
- (38) : , The Prospects of Industrial Civilization, P. 264
- (39) W. R. Niblett, Education—The Lost Dimension—, P. 133
- (40) B. Russell, Has Man a Future? 訳書 日高一輝「人類に未来はあるか」あとがき P. 188